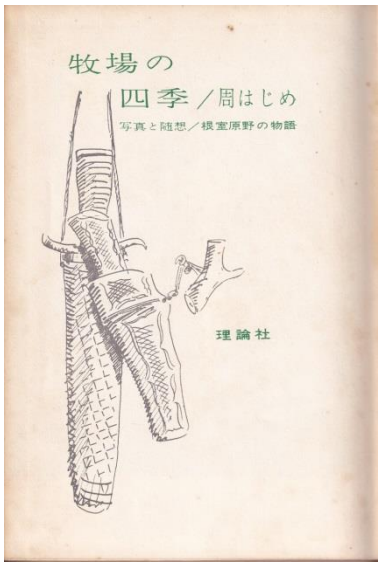
周はじめ著『牧場の四季』

ちょっと（相当に）古い本で恐縮であるが、現在でもアマゾンの古書で購入できるので、紹介したい。

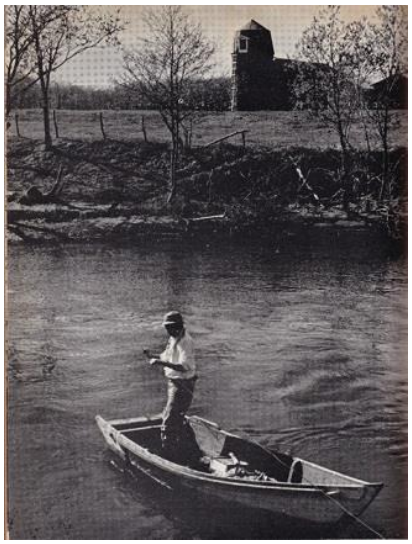
高年の方々はお読みになった方もあると思うが、60 年程前に動物生態写真家が北海道・根室原野の牧場に 2 年間ほど住み込んで、そこの自然や、牧場・開拓農場に入植している人々との交歓を描いた根室原野の物語である。「森へ消えた男」、「カムイの呼び声」、「牧場のスケッチ」の三話からなっている。

エッセー風ではあるが、物語風でもあって、随所に挿入されている原野の昔懐かしいセピア色の写真の雰囲気と相俟ってストーリーテラーの炉辺談義をたっぷりと堪能できる。できれば、山深い掘立小屋で囲炉裏の煙に燻されながら、欠けた酒茶碗片手に灯油ランプの微かな灯りの下で読めば一層の興趣が湧くのではなかろうか。

小生の駄文で紹介するよりも、挿入されている写真をご覧頂いた方がピンとくると思うので、下に二、三掲げる。



（扉）



（西別川の渡し）

（風連湖上の漁夫）

（初夏の牧場）

また、同じ著者による『原野の四季』も興味深い。

『牧場の四季』: 1961 年理論社刊（絶版）、
アマゾンで古本 320 円～。
『原野の四季』: 1958 年理論社刊（絶版）

（酎、2019 年 10 月記）

——